

「歴史教育における中高接続の可能性と課題」

—授業改善の軌跡を踏まえて—

神奈川県立相模原中等教育学校 上野 信治

はじめに 報告概要

報告者は2024年4月から相模原中等教育学校に着任した。教員歴は12年目で、これまで主に世界史を担当してきたが、初めて中学3年生の「社会（歴史分野）」、および「歴史総合」を担当することになった。本稿では1年間の授業改善の軌跡を紹介しながら、中高接続の可能性や課題を述べたい。勤務校の文系生徒のカリキュラム（社会科）については以下のようになっている。

- 1年生…「社会（地理分野）」→週3コマ（45分）
- 2年生…「社会（歴史分野）」→週3コマ
- 3年生…「社会（歴史分野）」→週3コマ & 「社会（公民分野）」→週2コマ
- 4年生…「歴史総合」→週1コマ（100分授業） & 「公共」→週1コマ
- 5年生…「地理総合」→週1コマ & 「世界史 or 日本史探究」→週2コマ
- 6年生…「世界史 or 日本史探究」→週1コマ

本稿で紹介する生徒は、中学2年の歴史分野で「市民革命～アヘン戦争」までの通史を学習した中学3年生である。そして本校のカリキュラムで特徴的な点が、後期課程（高等学校に相当）の前倒し制度によって、本来は高校で学習する「歴史総合」を中学3年生から学習する点である。2024年度は1月から「歴史総合」の授業をはじめた。

「歴史総合の前倒し」は学校の既定路線であるが、具体的にどう実践するかは教科担当者に委ねられている。そこで本稿では、中学3年生に歴史総合を教える取り組みの中で気付いた中高接続の可能性や課題を整理したい。

1 実践① はじめての中学社会（歴史分野）をどのように実践したのか

報告者にとって初めての中学歴史となるが、中学歴史教科書は想像以上に力が入っており、示唆を受ける点が非常に多かった。本文の中で、具体的な歴史事象は挙げずに変化や影響を述べている点や、空間軸や時系列が理解しやすいように記述されている点などである。そこで、高校の授業で多く使われる穴埋め形式のプリントは使わず、教科書のコピーと板書を基本に授業してみようと考えた。過去に本校で歴史総合（中学3年生）を担当した教員からの引継ぎで、「中学の通史も学習していない段階では、歴史総合の問いづくりは厳しい。」と聞いていたこともあり、まずは中学歴史を丁寧にやっていくことに努めた形である。

歴史総合を見据えた授業としては、史資料を授業プリントに取り入れた点である。歴史の大きな流れを理解させるとともに、諸資料から多面的・多角的な考察をさせたり、現在とのつながりを考察させることは、歴史的な見方・考え方を育てるうえで効果的だと感じた。ただし、こうした取り組みで見つかった課題が、物知りの生徒にはあまり効果を感じなかった点である。つまり、「歴史学習とは確定した事実の暗記であり、原因や構造を理解

することが歴史の学習である」という学習観がある生徒が少なからずおり、彼らにはさらなる授業改善が求められると感じた。

2 実践② 単元まとめ学習

学習指導要領においても、中学歴史では、歴史の大きな流れを理解することが重要だとされている。そこで近代化の単元まとめでは、学習事項をカテゴリに分ける学習課題を課した。加えて、「過去に生じた変化や社会問題が決して現代社会とも無関係ではない」という問題意識（報告者にとっての“歴史的な見方・考え方”）を生徒にもってもらうために、近代化の功罪を考察させる課題を課した。生徒の成果物は図1のようなものである。

3 実践④ 小単元まとめとしての「重要な問い」

紙幅の都合から、大会当日に報告した実践③（ノート提出）は省略する。実践④では、「小単元の中で最も重要だと考えた問いを1つ挙げる」という課題を紹介する。授業では毎回、教員が問いを設定して授業を行ってきた。周知のとおり歴史総合では「問いづくり」が学習活動の1つに位置付けられている。そこで中学3年の段階でも「問い」に意識を向けさせ、探究学習や歴史学習にも接続させることを意図したワークである（図2）。

一方で、この大単元では「時代を概観する」ための足場架けが不十分であった。一部の時代のみに焦点を当てて「（普通選挙法などに注目して）民主主義が広がった」とまとめる生徒もいれば、「（戦争の時代に注目して）民主主義が抑圧された」とまとめる生徒も出てきてしまった（図3、図4）。改善案としては、推移を意識させるために民主主義の拡大や抑圧を折れ線グラフなどで表現させるワークなどがあるだろう。その後文章で記述させると、「推移をふまえた時代の概観」ができるのではないだろうか。

4 実践⑤ 歴史総合を意識した「問いづくり」

歴史総合の学習では単元の中で「問いづくり」の活動が求められている。『学習指導要領解説地理歴史編』によると、その意図するところは「学習内容に対する

Q2.以下の各句は、どの分野における「近代化」と変わりが強いだろうか？ カテゴリ分けをしよう。
（複数のカテゴリに分類してもよい）

【 地租改正 土地調査事業 産業革命 憲法 条約改正 半乳革命 南洋置業 工場法 選挙権 】

社会・経済・産業	政治・制度
地租改正 憲法 選挙権	辛亥革命 条約改正
社会・経済・産業	政治・制度
工場法 産業革命	地租改正 土地調査事業

Q3.日本の「近代化」によって、新たにどんな問題・課題が生まれたのだろうか？ 上のカテゴリから1つを選び、その観点から「近代化」の功罪について考えよう。

選んだカテゴリ: 社会・経済・産業 (選んだカテゴリを記入)

農工業の分野で、1890年代には綿糸輸出の国に上り、
いて利益を得た。しかし、その産業をえた労働者の多くは、
若いうちに安い賃金で長時間労働を強いられた。また、
寮も不衛生で、にどの理由から、神経痛で死なすものも
あり、深刻な社会問題となった。この時期、児童労働問題も
【評価】 A: 「近代化」の功罪を考察している。歴史が「近代化」の功罪を考察している。
B: 考察が不足している。C: 多くの不足・誤りがある

図1（上）：近代化の振り返り

<12月ノート提出 チェックリスト>

プリントNo	教科書	最も重要だと考えた問いを1つ
38-43	P224-229	いかにいかにとてか、いかにいかに、 たか戦争は始まったか、なぜ戦争 は始まったか？
44-49	P230-237	政治には民衆の意見反映が 当時の人はどう考えた？
50-57	P238-245	大衆が選挙に期待したのはなぜか？
58-66	P246-257	日本国民は馬鹿されていったのか？

図2（上）：問いによる時代の概観

<時代を概観する> 教科書 P259

Q: 今回のテスト範囲の時代（近代後半）は、どのような時代だったのか？

国民生活の観点から、どう考えられる？	民主主義という観点から、どう考えられる？
物産の豊かさと実業革命が 下がり、資本主義の発展として も、大衆化が進み、世界 恐慌の時代、経済的混乱 的時代。	大正デモクラシーにより、民主主義の 拡大が図られ、1911年の選挙権法 がこた。1925年には普通選挙法が 成立し、国民の意見が政治に 反映されるようになった。

Q: 今回のテスト範囲の時代（近代後半）から、何を学ぶことができるだろう？

戦争の責任は現代の私たちに全くないわけではない。戦争と平和、同じことが起こるようなことを防ぐことが、
考えておくべきことではない。

【評価】 A: プリントの問いや考察をすべて記入している。重要な問いを表現している。
B: プリントのうち、一部の問いや考察が不足している。C: 多くの不足・誤りがある → 修正されたC

図3（上）：時代を概観する振り返り

<時代を概観する> 教科書 P259

Q: 今回のテスト範囲の時代（近代後半）は、どのような時代だったのか？

国民生活の観点から、どう考えられる？	民主主義という観点から、どう考えられる？
巨額の軍事費のための増徴は、 生活が苦しくなり、軍の力が まわったこと考えたから。	言論統制や検閲制度など、 政治の自由がなくなり、民主主義 の力がまわった。

Q: 今回のテスト範囲の時代（近代後半）から、何を学ぶことができるだろう？

当時の日本国民は、税金など、政治的責任を感じ、
軍に期待を寄せた。ところが、この原因で戦争に
入り、それがどう現在につながるか、学ぶことが

図4（下）：時代を概観する振り返り

生徒の課題意識を育むこと」(p. 129)だとされている。しかし同時にこの学習は「中学校までの学習及びこの科目のそれまでの学習を踏まえ…」とされている。歴史総合の意図する展開とは異なるが、学習後に「問いづくり」をさせてみたのが実践⑤である。定期試験で初見資料を掲載し、その内容をふまえて生徒に問いを表現させた。さらに、問いについては「時系列、比較、現在とのつながり」などのカテゴリーを指定し、その指示に沿った問いを正答と扱った。

具体的には、図5～図6にまとめている。この試験問題では、『ベルツの日記』を引用したうえで、「現在とのつながり」に分類できる問いを表現させた。厳密な採点をしたわけではなく、現代社会を考えるような問いを表現できていれば正答として扱った。この実践の狙いも、「歴史学習は事実の暗記ではなく、学習を通して社会への課題意識を持つ」ことにある。生徒の答案を見ると、「過去を学ぶこと」について比較したり、「現代人との違い」に関心を持っていることがわかり、通史学習を終えた後の「問いづくり」には「歴史観」や「世界観(現代社会への課題意識)」を考えさせる学習活動になる可能性を感じた。

図5 (下) : 問いづくりの定期試験問題。『ベルツの日記』より

14. 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

昨今の歴史教育においては、「問いをつくる」ことの重要性が指摘されている。この背景には、学習において「問い」がなければ、「学ぶ意味」を感じることが難しいという考え方がある。そこで、素朴な「問い」を重ねていくことで、歴史に対する課題意識や問題意識を持つことが、こうした学習の狙いである。

しかし一方で、「問い」は多種多様である。そのため歴史の学習においては、「歴史的な見方・考え方を働かせた問い」が重要となる。文部科学省は「歴史的な見方・考え方を働かせた問いの例」を右表のように集約している。

次の資料からあなたが疑問を感じたり、課題意識を感じたことについて、「問い」の形で1つ表現しなさい。ただし、右の表の類型⑤にあたる「問い」にすること。 38

資料 ベルツの日記 (1876年10月25日)

……ところが——なんとも不思議なことには——現代の日本人は自分自身の過去について、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや何もかもすっかり野蛮なものでした。」とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。

……これらの現象は、大変不愉快なものである。日本人が自国固有の文化を軽視すれば、かえって外国人の信頼を得ることはできない。

……日本人はお互い外国人を学問の果実の切り売り人としてしか扱っていない。つまり、根本にある精神を探究することなく、最新の成果さえ受け取れば十分と考えている。

(『ベルツの日記』より)

ベルツ：(1849～1913年)
南ドイツ生まれ。1876年来日した外国人医師。
東京大学医学部で26年間学生の指導と診療にあたった。

<問い>
かつて知っていた日本の過去を学ぶことが、今では軽視されているから、これにはどのような意識が必要なのだろうか。

<問い>
近代化前をいみ嫌っていた日本人の精神は今の私たちに何を残しているのだろうか。

<問い>
歴史を知っていたからといって過去の日本人と、歴史を学ぶ現代の日本人とでは、意識にどのような違いがあるのか。

<問い>
現代の日本人が自国固有の文化を軽視することは、現代においてどのような問題となっているのか？

図6 (上) : 『ベルツの日記』をふまえて生徒が作成した問い。

5 実践⑥ 1月からはじまった「歴史総合」

12月までの中学歴史で、生徒は終戦までを学習した。そして戦後史からは歴史総合へと移行した。ここで紹介するのは、大項目B(4)の「現代的諸課題」に位置付けた学習である。G HQの改革から、現代社会に繋がる問題(近代家族の課題)を調べさせ、どのような改善や解決が求められるかを考えさせた(図7)。

歴史学習を「問題」として捉えていくこと、当事者意識をもって歴史を学ぶという狙いは達成できたように感じたが、一方で時間数の不足やWEB記事のまとめになってしまう生徒がいたことも課題として挙げられる。

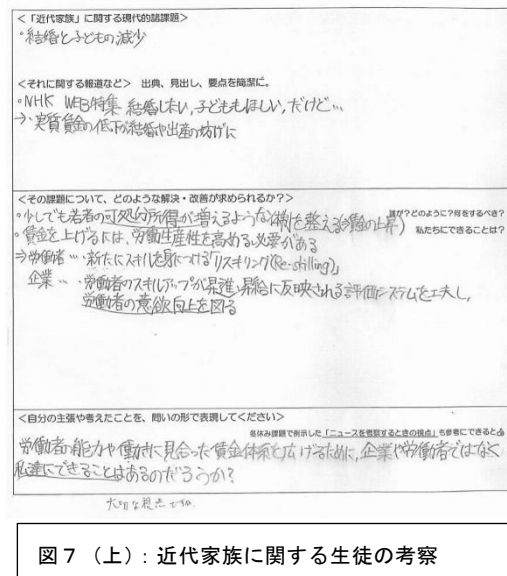


図7(上): 近代家族に関する生徒の考察

6 実践⑦ 戦争の記憶・記録に関する調査

授業展開としては、まず映画「ラーゲリより愛を込めて」を鑑賞。その後、映画の原典となった、山本顕一『寒い国のラーゲリで父は死んだ』(バジリコ、2022年)を取り上げながら、登場人物の描かれ方の違いについて考えさせた。そして各自が戦争の記憶・記録に関する調査を行い、調べた内容を「歴史新聞」にまとめた(図8)。図書館などで戦争体験者の史料は多く残されているが、この学習に取り組ませるうえで、まず映画学習から入ることは大きな有用性(学習としての必然性)を生徒に感じさせることができたと思う。

大会当日の質疑応答では「生徒の成果物を学校外に発信する機会はあるのか」という質問があった。本質的にはこれは学習評価とも関連する問いだが、これは報告者も悩んでいる点である。授業時に実践したのはNHKのWEBサイト「戦跡」への投稿であった(2026年2月現在、このページは見つからない)。せっかくの生徒の探究成果を学校内で完結させるのは勿体ない気持ちがあり、例えば地域の博物館や図書館と協力した展示などが有効だろう。日本史研究推進委員会が取り組んでいる博学連携は、こうした実践と親和性が高いように思う一方で、教科担当者や学芸員の負担も考えて持続可能なやり方を模索する必要があるだろう。

7 「戦後史の3か月だけ歴史総合」という中学3年生を担当して

当たり前だが、中学歴史を終えた高校1年生への歴史総合と、通史も終えていない中学3年生への歴史総合は全く異なることを再確認した。本校のように中高6年間の完全一貫校だからこそ「前倒し」は有効かもしれないが、中学歴史をふまえているからこそ歴史総



図8(上): 生徒の成果物

合のような学習活動は可能になる。いわゆる困難校においては、「中学歴史の学びなおし」が歴史総合の授業内で行われているという話を聞いたことがあるが、せっかくであれば中学歴史の内容を学びなおすだけでなく、歴史総合ならではの学びを体験させることが重要なのではないだろうか。(もちろん学びなおしは重要であり、不要だと主張したいわけではない)

8 おわりに

既に述べたように、授業づくりにおいては「物知りな生徒」が陥る学習観を揺さぶることを常に意識していた。しかし、そのような授業展開においては、むしろ定期テスト以外のほうが学習評価がやりやすく、定期テストの方式や内容を変えること（例えば定期テストを持ち込み可にするなど）も有益だったのではないかと反省している。

今回いくつかの実践を紹介しながら、「歴史総合前倒し」の可能性や課題について述べてきた。一般的な意味での中高連携とは異なるが、高校で歴史総合を実践する際には、中学段階の学習内容を理解しておくことが重要であることを強調したい。特に、歴史よりも公民分野の学習が歴史総合や「問い」につながっているように思う。中学校学習指導要領（社会）では、学習の際に着目すべき点を例示しており、「対立と合意、効率と公正など」「分業と交換、希少性など」「個人の尊重と法の支配、民主主義など」「協調、持続可能性など」が現代社会をとらえる枠組みとされている。これらは歴史総合で現代的な諸課題を考察するための観点として例示されている「自由・制限」「平等・格差」「開発・保全」「統合・分化」「対立・協調」ともつながる枠組みである。実践⑥で取り上げた「近代家族」に関する学習では、このような視点が欠けていたように思う。今回は「現代社会においてどのような改善・解決が求められるか」を考えさせたが、これは純粋な歴史理解というより、社会の構造や問題を分析する思考を求めている。その思考の枠組みこそが、中学公民で培われる見方・考え方だったのではないだろうか。

もちろん、現場レベルにおいて教室内の授業でこうした観点が具体的に活用されているかは学校・教科担当による差があるだろう。その意味では、中高がお互いに授業研究を発信・受信し続ける取り組みが求められる。そして両者の議論ができるとすれば、その一つは教科書にあるのではないだろうか。高校教員は中学社会の教科書をふまえて授業を考え、中学教員は高校の「歴史総合」「地理総合」「公共」の教科書を見据えた授業を考える。そしてそれらの意見交換の場として、社会科部会が機能するような未来を期待したい。（例えば、高校教員が中学公民の『対立と合意』『効率と公正』などの枠組みを意識して歴史総合の問いを設計することが、中高接続の現実的な入り口になるのではないか）

今回は中高一貫校の社会科教員として、中学3年生の歴史の実践と授業改善の軌跡をまとめ、歴史総合との接続を模索する過程を紹介した。高大連携だけでなく、中高連携が進展することで社会科教育がより発展していくことを望んでいる。